

支部会報 創刊によせて

四国支部 副支部長
本部理事

武山 正人
(香川県)



四国支部会報の創刊号の出版、誠におめでとうございます。

長い間の悲願でありました四国支部新設が現実になり、初めての支部会報を出版することになりました。これまでの道のりを思い起こしますと、良くぞここまで感慨深いものがあります。これからは、四国支部として四国4県の結びつきをより密接にし、支部会員サービスの向上に努め、会員数の維持、増強を図る努力が求められます。そのためには、これまで以上に裾野を広げ、県技術士会などとの交流を大事にしていかなければなりません。なぜならば、四国支部の会員規模は、(社)日本技術士会各支部の中では一番小さな支部になります。この少ない会員数で支部活動を維持するためには会員の増強は重要課題であります。また、四国支部新設に関して各県技術士会会員を中心にしたアンケート調査によりますと会員の16%は、四国支部の設立により入会を考えても良いとの回答をいただいております。皆様のご協力をお願いします。

四国支部新設にいたる経緯は、支部長から報告がありますので、私からは、現在理事会で検討されている課題の一部を紹介いたします。理事会は、2ヶ月に一度の割合で開催されております。最近の課題としては、公益法人改革問題、中・四国支部分離新設問題、役員定年制問題、理事会議事録詳報問題、理事選挙制度問題、地域組織問題などが、議論されてきました。はじめの2項目は、その方針は決定、実施済みであります。3項めの役員定年制問題は、理事発議によるもので、支部長、部会長、常設委員会及び実行委員会委員に対する定年制度の導入に関する提案がなされました。審議の結果、発議書の定年制導入は見送りになりました。議事録詳報問題は、会誌「技術士」に掲載されている理事会議事録の内容が、画一的であり、議論の内容が読み取れないという意見であります。これに関しては、広報委員会で検討することとしており、最近の議事録を見ただけであればわかると思いますが、徐々に内容を工夫していっています。会員の皆様に、(社)日本技術士会の最高意思決定機関である理事会の活動状況を、今までより詳細に提供していく方向で引き続き検討中あります。理事選挙制度問題は、理事発議で、理事当選最低得票数を50票から200票に引き上げようとするものです。この理事選挙制度問題は、中・四国支部が分離新設されることにより、理事枠の取り扱いに再考すべき事項が発生したとすることによるものであります。即ち、支部選出理事枠の拡大に伴う自由枠の減少と、理事選挙一票の重みの問題です。四国支部にも将来影響ある問題です。今後、継続検討がなされます。地域組織問題は、支部に関係する問題であり、支部と県技術士会との関係や(社)日本技術士

会会員による新しい県技術士会の組織や枠組みなどに関するものであります。まだ検討過程の段階ですので、機会を見てお知らせできると思います。

この一年間本部理事として理事会に参加し、議論する中で、(社)日本技術士会のメンバーは多種多様な価値観をもった非常に高度な技術者集団であり、その多様さゆえに技術者の枠を超えた付き合いができることを強く感じています。また、その付き合いは貴重であるとも思っています。

その例として、平成22年10月中旬、日韓技術士会議（下関）に参加する機会を得ました。私としては、初めての日韓技術士会議なので、話題を共有できる方はいないか探しました。その中に韓国水資源公社（Korea Water Resources Corporation、K-Water）の技術者が出席されており、お会いすることができました。

少し話がそれることになりますがお許してください。

K-Water とのつながりは、1991年にさかのぼります。その年ウイーンで国際大ダム会議が開催され、出席したのですが、そのアフタースタディーツアーでのことです。ミンスク（旧ソ連邦、白ロシアの首都）の空港でエアフロート機に乗り換える間、空港ロビーで時間がありました。以前、私の父から、旧制徳島高等専門学校土木工学科の同級生に、韓国政府の次官で、日本で言う水資源開発公団の総裁を務めた人がいるということを知っていました。名前も知らなかったのですが、韓国の名札をつけた方に、ロビーでその話を始めたら「君は武山君の息子か」と流暢な日本語の返事が返ってきました。話しかけたその人が本人だったわけです。安 京模（アン・キョンモ）さんと言います。K-Water の社長さんでした。

2009年に、ある海外調査団に当社の技術職員を参加させ、K-Water にも立ち寄りというので、安さんの消息を尋ねてみてほしい旨伝えました。そのときの知人を通じて、今回の出会うことができました。その訳は、今年（H22）の8月に私の父が亡くなり、安さんがご存命ならば、そのことをお知らせしたいと思っていたからです。しかし、安さんも同じ今年の8月に3日違いでなくなっていました。これを通じて、日本留学の経験のあるご息子と連絡が取れ、息子同士の交流を始めることになりました。奇遇ではありますが、(社)日本技術士会の交流が、いろいろな出会いを作ってくれたのです。

私は、常日頃、立派な技術者・技術士たると同じく社会に範たる社会人、教養人でなくてはならないと感じています。支部活動も、技術のみならず、社会人としての教養を磨く場であってほしいと思います。

このたび、新生(社)日本技術士会四国支部設立総会も無事終わり、新役員のもと、新年度の事業がスタートいたしました。これからの(社)日本技術士会のあり方、四国支部のあり方、進むべき方向、これらを皆様の協力を得て、立ち止まらず、走りながら考えていく事になります。より良き技術者・社会人・教養人をめざして。